アカディアン・コミュニティの新たな動向
──「世界アカディアン会議 2014」に参加して ──

太　田　和　子

1

2014 年夏，アカディアンの人々にとって待ち望んだ時が再び巡ってきた。1994 年以来，5 年ごとに開催されてきた「世界アカディアン会議（Congrès mondial acadien）」の 5 回目となるこの年は，カナダのニューブランズウィック州とケベック州，隣接するアメリカ合衆国のメイン州一帯を含む大地や森林が舞台となった[(1)]。前回（2009 年）の「会議」が，ニューブランズウィック州北東部のアカディアン・ペニンシュラを中心に開催され，主として漁業や水産資源とアカディアンの暮らし，すなわち海とアカディアンとの関わりがそのテーマであったことに呼応する展開といえよう。

ただ今回の設定がこれまでと比較してユニークなのは，開催された地域が，カナダとアメリカ合衆国という二つの国家と三つの州にまたがっているという事実である。行政的に考えて，一見無謀で野心的なこの試みには多くの困難が予想され，当初は異論も出た。だが，この地域のアカディアンや先住民たちが近年まで一帯を自由に動き回っていたことを思い起こせば，むしろ為されるべき「当然」の試みだったかもしれない[(2)]。

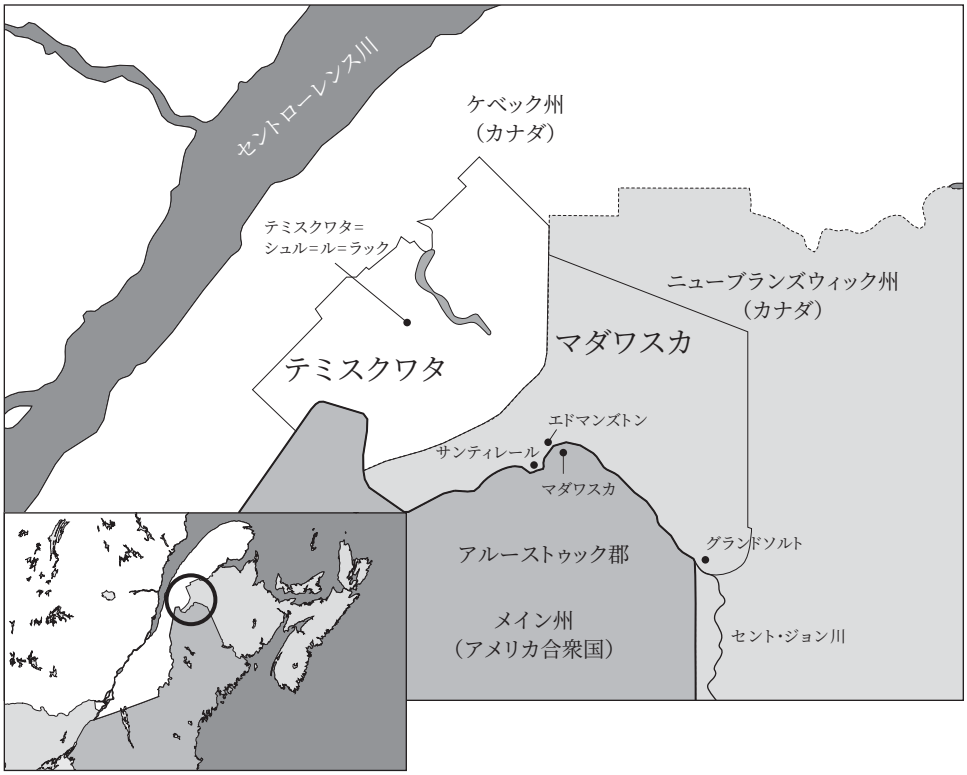
いうまでもないことだが，「アカディアン」とは一言で言えば，17 世紀初頭〜18 世紀にかけて，主としてフランス南西部から，かつての北米大陸，フランス領（現在のカナダ東部）へと移住した人々とその子孫を指している。18 世紀中葉に激化した北米における英仏間の抗争下で，「中立の民」として生きてきたアカディアンたちは，1755 年，7 年戦争（北米ではフレンチ＆インディアン戦争）の開始直前に居住地からの突然の強制的な追放という悲劇に見舞われる。「大追放（le grand dérangement）」と後に呼ばれるものである。大半の住民約 1 万人が，イギリス軍によってペンシルヴェニアなどの北米イギリス植民地へ強制移住させられたり，イギリス本国やフランスへ送還されたりした。森林の奥深くや，遥か南の，当時はまだフランス領だったルイジアナへ逃れた人たちもいた[(3)]。

こうして各地に離散したアカディアンの子孫たちは移住した先々で何とか生きのび，現在のカナダ東部沿海諸州（Maritimes）やケベック州南東部，アメリカ合衆国のメイン州セント・ジョン川沿いおよびルイジアナ州南西部には，合わせて 80 万に及ぶ人たちが暮らして

いるといわれている。「世界アカディアン会議」はこうして世界中に離散したアカディアンの末裔が5年に1度集うという画期的な試みなのである。

筆者は，1980年代初頭から，アカディアン／ケイジャンと呼ばれるこの少数集団に注目して，カナダ東部およびルイジアナ州で調査，研究を行なってきた[4]。今回は，彼らの「エスニック・サバイバル／リバイバル」「民族文化復興運動」とも称されてきた一連の運動の，今や中心的行事となっているこの「世界アカディアン会議2014」に参加して，行事そのものの参与観察を行ない，アカディアン・コミュニティの新たな動向を探った。

この会議の第1回目は1994年，アカディアンが最も多く集住するカナダ，ニューブランズウィック州モンクトン，シェディアック地域において，モンクトン大学を中心として，当時の国連事務総長ブトゥロス・ブトゥロス・ガリ，フランスの文化相，カナダの首相，州知事たちも迎えての大規模な国際会議および祝祭，文化行事などの複合として開催され，世界中から注目を浴びた[5]。その後，アメリカ合衆国ルイジアナ州で第2回目が催され，第3回目は2004年，北米大陸移住400周年記念と重ねてカナダ・ノヴァスコシアの聖地グラン・プレを中心にして盛大に行なわれ[6]，続く第4回はニューブランズウィック州のアカディアン・ペニンシュラがその舞台となった。そして今回はセント・ジョン川渓谷をはさむ，アメリカ合衆国とカナダの国境地域，ケベック州との州境というユニークなセッティングの中で，ということになる（地図参照）。



この地域一帯はもともとマダワスカと呼ばれ，真ん中をセント・ジョン川が流れている。先住民マリシートは数千年にわたりこの地に暮らしてきた。やがて「追放」を逃れたアカディアンやケベックからの人々がやってきて住みついたのは，18 世紀後半といわれている（記録によれば 1785 年とある）。人々は，主として森で猟をする猟師であったり，木材を伐採する木こりであったり，農業や牧畜を生業として暮らすようになった。19 世紀後半になると，豊富な木材を利用してパルプが作られ，製紙工場が操業を始めるようになる。大勢の労働者が必要とされるようになり，工場労働に従事するようになって，エドマンズトン（Edmundston）は製紙業の中心地として発展してきた。そんなわけで，開会式はニューブランズウィック州のエドマンズトン，中日の祝祭日はアメリカ合衆国，メイン州のマダワスカ（Madawaska），閉会式はカナダ，ケベック州のテミスクワタ（Témiscouata）といった具合に三つの地域の各々の中心部で開催された。会期はこれまでの「会議」と同様，2014 年 8 月 8 日から 24 日まで，8 月 15 日の聖母被昇天の祝日を中日として，前後 2 週間余り，この間に様々な行事が至る所で行なわれた[7]。

2

筆者が参与観察を行なった主要な行事の概要を以下に記述する。

〈開会式〉

2014 年 8 月 8 日，セント・ジョン川を見下ろして建つ製紙工場の煙が立ちのぼるエドマンズトンで開会式が行なわれた。二つの国，三つの州の知事等来賓による挨拶に続いてアカディアンの伝統的な歌や踊りが披露された。注目すべきはこの地域に暮らす先住民マリシートの参加である。第 3 回目の「世界アカディアン会議」以来，近隣の先住民が参加するようになっており，今回もごく自然な形で首長が来賓として出席し，彼らのダンスが彩りを添えた。式に続いて恒例のスペクタクル（大コンサート）が催された。名の知られたアカディアンのミュージシャンたちが総勢でこの祝祭の門出を祝った（写真 1, 2, 3, 4, 5, 6）。今回のホストミュージシャンは，この地域出身で人望も篤く人気の高いロック・ヴワジン（Roch Voisine）であった。

翌日からは関係する 50 の市町村で，各種のサミットやシンポジウム，コンサートやお芝居，展覧会，ファミリー・リユニオン，ゲームやスポーツ大会にいたるまで，様々な行事が行なわれた。その紹介プログラムだけでも 100 ページを超える[8]。人々は国境や州境を越えてアカディアの旗をなびかせ，笑顔で挨拶を交わしながら長い距離を車で移動し，多くの行事に参加した。

〈アカデミック・コンファレンス〉

エドマンズトン（N. B.），モンクトン大学エドマンズトン・キャンパスで 8 月 12 日から 3 日間にわたってアカディア研究専門家会議が催された。このアカデミックなコンファレンスでは，アカディアの歴史や社会，文化，政治経済など広範な分野にわたる研究の成果が発表され，活発な議論が展開された。アメリカ合衆国南部ルイジアナ州のケイジャン・コミュニティの現在について報告した，かつてのケイジャン・ミュージックのアイドル，伝説の人気歌手だったザッカリー・リシャール（Zachary Richard）のプレゼンテーションには温かい共感が寄せられた（写真 7）。また，詩人で作家，芸術家として尊敬され，副総督としての役割を終えたばかりのエルメネジルド・シアッソン（Herménégilde Chiasson）のプレゼンテーションに対しては大きな反響があった（写真 8）。1970 年代以降のアカディアン・ルネッサンスと呼ばれる，ここ 3，40 年のアカディア社会の歩みについて分析した若手研究者ジョエル・ベリヴォー（Joel Belliveau）の報告に対しては熱い議論が巻き起こった[9]。言語の問題は常々多くの研究者たちを惹きつけるテーマだが，今回も言語に関する幾つもの発表が行なわれ，どの会場も人が入りきれないほどの活況を呈していた。最終日午後の全体を締めくくるシンポジウムでは，各部会での論議が報告され，アカディア社会の進むべき方向性をめぐってのさらなる討論が続いた。

〈タンタマール Tintamarre〉

世界アカディアン会議の中で人々がもっとも楽しみにしている行事の 1 つは，8 月 15 日，アカディアの守護聖人，聖母被昇天の祝日（L'Assomption）に行なわれるタンタマールというどんちゃん騒ぎである。人々は思い思いにハリボテの人形姿になったり，伝統的な衣装に身を包んだり，仮装したり，アカディアの旗を身につけたりして，大きな音の出るなべやスプーンや笛やラッパを打ちならして通りを練り歩く。第 1 回から回を追うごとに参加者が増え，カラフルになってきて，今回はカナダやアメリカから馳せ参じた 1 万人近くの人たちが，会場となったアメリカ側のメイン州マダワスカの目抜通りを歩いて，夕方，大コンサート（スペクタクル）が行なわれる丘の上の公園へと移動した。みんなが参加するという一体感，バカげた格好やできるだけ大きな音を出して大はしゃぎする，普段はとてもできない行為をすることの解放感に満たされて，老若男女，どの顔も幸福感に溢れている。続く大コンサートでは，電気系統の不調などものともせず，舞台のミュージシャンたちと共に歌い，踊り，フィナーレでは数千発の花火が打ち上げられ，興奮もさめやらぬまま，みな家路に着いた。川向こうのカナダからやってきた人達は，再び国境や州境を越えての大移動となった（写真 9, 10, 11, 12, 13, 14, 15, 16）。

〈同姓一族の集い　ファミリー・リユニオン〉

同じ姓を持つ一族が一堂に会するこの集いは，「会議」の中でも大切な行事の一つである。

アメリカやカナダの各地では系図学が盛んで，公共図書館にはたいていその道の専門家がいて，個人の系譜を調べてくれるが，近年はインターネットの発達でさらに多くの情報が入手可能になった。今回は友人ウワレット一族（The Ouellettes）の集まりに特別参加した。エドマンズトンから車で 30 分ほどの，セント・ジョン川沿いにある，小さな町サンティレール（Saint-Hilaire）のはずれにある野原に大きなテントがはられ，そこに 300 人を超えるウワレット一族が集まった。遠くはフランスから，ケベックやアメリカの各地からも時には車のキャラバンを仕立ててやって来ている。8 月 16 日，17 日 2 日間にわたるこの集いでは，系図学のブースやパネルが設けられ，歌や踊り，音楽演奏などのパフォーマンスが披露され，各種のゲームや特産物のオークションも行なわれた。食事も戸外でのバーベキューをはじめ三食がふるまわれ，5 年ぶりに再会した親類縁者や新しく出会った人たちの間で話が弾んでいた。17 日（日）朝には近くの教会の聖職者が招ばれてミサが執り行なわれた。ほとんどがカトリック教徒であるアカディアンにとっては重要なモメントである（写真 17, 18, 19, 20）。

こうしたファミリー・リユニオンの催しは登録告知されているものだけで 114 にのぼり[10]，私邸での小さな集いから，体育館を貸し切りでの大集会まで多岐にわたる。いずれにせよ，これが多くの人々を「会議」に惹きつける重要な要素として機能し，大切な役割を果たしてきていることは間違いない。

〈女性サミット〉

初回からやはり重要な行事の 1 つとして位置づけられている女性サミット（Sommet des Femmes）は，8 月 17 日～19 日，エドマンズトン（N. B.）で開催された。各地からの代表や参加者によって，女性と政治参加，地域経済開発の問題，キャリアを追求する上での課題，身体と自己決定権など，アカディアの女性たちの抱えている問題に関して，多彩な議論が活発に行なわれた。ワールド・カフェ方式の情報交換，コミュニケーションも行なわれた。今回のハイライトは，最終日の行事，近隣の先住民マリシートの居留地へのデモ行進とそこでの昼食会であった。女性たちは，「少数集団（マイノリティ）に権利を！」という横断幕を掲げて，1 時間以上かけてデモ行進をした。目的地，マリシートの居留地では，手作りの温かいスープとパンが振舞われ，心のこもったもてなしを受けて，参加女性たちは楽しいひとときを過ごした。今回はアフリカ，フランス語圏からの難民や留学生も招待されていて，ランチョンの席でふるさとの話が披露され，女性たちに共通する地球規模での様々な問題が共感を持って語り合われた。どの文化においても女性たちの方が他の文化に対してよりオープンだという説があるが，なるほどと納得できるシーンであった（写真 21, 22, 23, 24, 25）。

さて，こうしたサミットは女性たちに限らず，若者たちのものもあり，今回は新たにシニア・サミットも設けられた。

〈その他〉

モンクトン大学エドマンズトン校キャンパスには広報用に様々なブースが設けられ，そこではマルチメディアを駆使して映像などによる情報発信が行なわれていた。たまたまそこを訪れていた時，アカディアの代表的な芝居，アントニン・マイエ作の「ラ・サグウィン（La Sagouine）」[11] を数十年にわたって演じてきた女優，ヴィオラ・レジェ（Viola Léger）のラジオ・インタビューが行なわれていた（写真 28）。23 日にはアメリカ側のフォート・ケント（Fort Kent, ME）にあるメイン州立大学フォート・ケント校の講堂でその芝居が実際に上演された。チケットはすぐに売り切れ，立ち見もでる騒ぎになった。そこでは実在の女優レジェは舞台上の人物，サグウィンと完全に一体化していた。聴衆は腹を抱えて笑ったり，泣いたり，いつの間にやら，みな舞台の世界に引き込まれていた。かつて，アカディア女性のシンボルはエヴァンジェリンだったが，今ではサグインがそれにとって代わる勢いである（写真 27）。

〈閉会式〉

こうして，2 週間に及ぶ各地での様々な催しが終わり，8 月 24 日カナダ，ケベック州のテミスクワタ=シュル=ル=ラックで閉会式が行なわれた。湖上に船を浮かべ，来賓たちが船上から岸にいる観客に向かって挨拶をするという予想外の趣向で参加者は大いに驚かされた。船の横には先住民マリシートのカヌーも登場し，彼らのやり方で参加していた。式が終わると，湖岸の公園へと舞台は移り，最後の大スペクタクルが始まって，主だったミュージシャン，アーティストが再び一堂に会して歌い，踊り，演奏し，聴衆と一緒になって最後の時を楽しんだ（写真 29, 30, 31, 32）。5〜6 時間に及ぶイベントが終わり，人々は名残を惜しみながら，ケベックへ，ニューブランズウィックへ，国境を越えてメイン州へ，ルイジアナ州へ，さらには海を越えてフランスへと戻っていった。

3

今回の「世界アカディアン会議 2014」の特徴は，何といっても

1. 国境，州境をまたいで様々な行事や活動が各地のコミュニティで実施されたことであろう。後になって線引きされた国境や州境が，どのようにこの集団の文化を分断し，変容させたかが如実に明らかになる。その顕著な例は言語にみられる。もともとアカディアンの母語はフランス語なのだが，アメリカ合衆国側，メイン州の住民たちやルイジアナ州のケイジャンたちにとっては，英語が彼らの言語となってしまっている。一方，カナダ，ケベック州の住民はフランス語のまま，またニューブランズウィック州の人々は多くが両言語使用者となっている。今回は，行事やイベント会場ごとに使用言語が異なり，人々はそれに合わせる形で柔軟に対処していた様子が印象に残る。

2.　次第に変化しつつある先住民との関係が，行事などで一層目に見える形で強調されるようになってきており，人々がそのことを自然に受け入れるようになってきている。今回は近隣の先住民がミクマックではなくマリシートで，人口が少ないこともあってだろうか，スムーズな共生のありようが目についた。
3.　アカデミックな研究部門が充実度を増し，そうした部分の役割が大きくなっている。後半に開催された森林資源と自然保護の問題，開発と経済の問題，さらにはエネルギー問題の会議も注目されていた。
4.　音楽シーンでは新たに若いアーティスト達が多く育っていて，音楽の傾向もこれまでと少し変化している。特にケベックと先住民の若いミュージシャンたちはラップを多く取り入れており，若者たちに好評を博していた。ただ，ザッカリー・リシャールは，アカディアン／ケイジャン文化のアイコン[12] として異彩を放っていた。イーディス・バトラー（Edith Butler）もまた，第 1 回目からアーティストの中心的な存在として，健在ぶりが光った。また，何十年にもわたり「サグウィン」役を演じている女優ヴィオラ・レジェは，コンサートにも登場して，その活躍ぶりが今回は強く印象に残った。
5.　ルイジアナからの参加者がやや少なかったせいか，食文化やケイジャン音楽，ダンスに精彩を欠いていたのが気にかかった。ただし，ルイジアナをはじめ，フランスやニューイングランドなど他地域のアカディアン・コミュニティの紹介テントやブース，レストラン，特設舞台の会場が，今回の中心地域マダワスカからかなり離れたカナダのグランドソールト（Grand-Sault）という町だったため，人々が足を伸ばしにくかったという物理的事情も関係していたかもしれない。ちなみにここは Expo Monde と呼ばれて，国際的なショーケースの場としての役割を担っていた。
6.　8 月 15 日の聖母被昇天の祝日には，一万人を超える人々が国境の橋を渡って，特別な行事「タンタマール」に参加，大変な盛り上がりを見せた。この行事は回を重ねるごとに規模が拡大していくように思える。教会の存在もこの時には可視化する。
7.　モンクトン大学エドマンズトン校キャンパスには，マルチメディア・パビリオンが設けられ，情報化社会の最先端技術を駆使して，「世界とつながる」という数々の実験的な試みが行われていた。情報化の進む社会では，これまで顧みられることのなかった周縁的な地域からも，様々な情報発信が可能となり得ることを明らかにした。

こうして第 5 回目の「世界アカディアン会議 2014」は盛会のうちに幕を閉じた。会期中の参加者はのべ 20 万人を数え，関係機関の試算では，この行事の地域に及ぼす経済的効果は全体で 2,840 万ドルにのぼったとの数字が出ている。この「会議」が観光の呼び水となって，地域振興に大いに役立っていることは，指摘を待つまでもなく明らかであろう[13]。

だが，無論その一方で今後の課題も見えてきて，会議終了後そのことが大いに論じられた。論点の一つは，次第に「会議」の規模が大きくなって，人々やコミュニティの活性化につな

がるのはよいことなのだが，開催地の負担が増していることも事実であるということ。マイノリティ集団としてカナダやアメリカ社会からその存在を認められるようになり，もはやその存続に問題がないと思われる今日，この「会議」の意義や役割，必然性はなくなったのではないかという声も少なからず出てきている。

しかし，大激論の末，次回（第6回）の世界アカディアン会議は2019年，カナダ，プリンス・エドワード島を中心として開催されることに決定した。これで「世界アカディアン会議」は2回目のルイジアナを除いて，アカディアンの「故郷」，そして現在もアカディアンが最も多く暮らしている地域，カナダ沿海諸州の各コミュニティを一巡することになる。

参加していて不思議に思ったことがある。1980年代，この「会議」の企画が進んでいた頃，重要なテーマだった「〈アカディアン〉とは誰のことか」という古くて新しい問いが，近年話題にもならなくなったことである。これは何を物語るのだろうか。今回の「会議」のホストであったエドマンズトン，マダワスカ地域の住民は，1755年に「大追放」された「アカディアン」のリストに載っていない姓名の人が多く，以前は，狭義では，アカディアンの範疇に入っていなかった。事実，彼らはブレヨンと呼ばれて，異なるアイデンティティと独自の文化を持つと認識されていた(14)。だが今回，その地域の住民が「アカディアン会議」の企画の中心となり，ホストとなって，成功を収め，内外から評価されている。このことは，「アカディアン」という言葉の定義がより広い意味で用いられるように変化してきていると考えざるをえない。やはり，排除ではなく寛容で，外に開いて包摂すること（inclusiveness）によってこの社会は生き延びてきたのではないだろうかと再認識させられる。「アカディアン」の再定義も，「会議」の今後とともに論じられるべき時なのかもしれない。

《謝辞》

本稿は，共立女子大学，総合文化研究所より，平成26年度個人研究の助成を得て行なった「アカディアン・ディアスポラに関する調査研究」の成果の一部である。ここに記して感謝の意を表する。現地では，アカディアの友人たち，中でもLise Ouelletteおよびその家族に大へんお世話になった。アカディアン研究が継続できているのはひとえにこの一族との30年以上の長きにわたる親交によるところが大きい。この場を借りて改めて心から感謝の気持ちを述べたい。

《註》

（1）「世界アカディアン会議2014」のテーマは「大地と森林のアカディア」（Acadie des terres et forêts／Acadia of the Lands and Forests）であった。

（2） カナダのニューブランズウィック州，ケベック州と，アメリカ合衆国メイン州との間に国境が定められたのは，1842年のウェブスター＝アッシュバートン（Webster-Ashburton）条約によってである。それまでセント・ジョン川の両岸に住み，自由に往来していた人々は，以後異なる国家に属することになった。しかしそれほど広くない川を超えての行き来は比較的自由でずっと続き，1920–30年代，アメリカ合衆国の禁酒法時代には，多くの人がお酒の密輸（smuggling）に関わったと伝え聞く。

（3） アカディアンのこの悲劇については，数多くの歴史書や詩や小説，絵画などにも描かれてきた。

H. W. ロングフェローの長詩『エヴァンジェリン』は中でも最も有名であろう。ここでは近年話題になった歴史書を 2 点紹介しておく。

N. E. S. Griffiths, *From Migrant to Acadian: A North American Border People 1604-1755*（Montreal／Kingston, 2005）.

John Mark Faragher, *A Great and Noble Scheme: the Tragic Story of the Expulsion of the French Acadians from Their American Homeland*（N.Y., 2005）.

また，大矢タカヤス『地図から消えた国，アカディの記憶』（書肆心水，2008）は，『エヴァンジェリン』の新訳とアカディアンの歴史を叙述した秀逸の書。

（4） 初めてアカディアンの存在を知ったのは，1979 年，メイン州立大学オロノ校で，セント・ジョン川渓谷から学びにきていた‘ケベコワではない’フランス系カナダ人と名乗る学生グループと出会った時である。興味を抱いて 3 年後，カナダ・ニューブランズウィック州，モンクトンにあるモンクトン大学アカディアン研究所に足を踏み入れて以来，今日まで 2〜3 年毎にアカディアン・コミュニティを訪れて，その様子を観察してきた。アメリカ合衆国，ルイジアナ州には 1989-90 年，2003-04 年と長期滞在し，ケイジャン・コミュニティの調査を行ない，北のアカディアンとの比較研究を行なってきた。

（5） 太田和子「「世界アカディアン会議」とアカディアン・アイデンティティ」森川眞規雄編，『先住民，アジア系，アカディアン ── 変容するカナダ多文化社会 ──』（行路社，1998）pp. 99-112.

（6） 太田和子「「世界アカディアン会議 2004」とノヴァスコシアのアカディアン・コミュニティ」『共立国際文化』23, 共立女子大学国際文化学部 2006　pp. 87-106.

（7） *Official Program.* CMA 2014, www.cma2014.com

（8） 同上

（9） Joel Belliveau, *Le《moment 68》et la réinvention de l'Acadie*（Ottawa, 2014）.

（10） *Album Souvenir,* Congrès mondial acadien 2014, Nov. 2014.

（11） 「ラ・サグウィン」の一部が浅井晃氏によって翻訳され，『アカディア女サグイン』と題して，メイプルリーフ・シアターによって上演された。（第 32 回カナダ文学会年次大会，2014 年 6 月名古屋，中京大学）

（12） Patricia Juste Amédée, *Zachary Richard: au large du cap enragé*（Les Intouchables, 2004）.

（13） ‘Other News The CMA 2014 ends on a positive note!’ www.cma2014.com

（14） 太田和子「現代の創世神話」川田順造・福井勝義編『民族とは何か』（岩波書店, 1988）pp. 180-181.; 太田和子,「アカディアンのエスニシティと民族間関係 ── ニューブランズウィックでの調査より ──」綾部恒雄編『カナダ民族文化の研究』（刀水書房，1988）pp. 83-84.

1. カナダ，N. B. 州エドマンズトンの風景　煙を出しているのは製紙工場（2014. 8. 8）

2.「世界アカディアン会議」の開会式を待つアカディアンの家族（2014. 8. 8）
赤白青の三色に星の入っているデザインはアカディアの旗を表している。

3. 開会式での来賓のスピーチ（2014. 8. 8）

4. 開会式に参加している人々（2014. 8. 8）

5.「世界アカディアン会議」開会式での伝統的なアカディアンのダンス（2014.8.8）

6.「世界アカディアン会議」開会式での隣人先住民マリシートのダンス（2014.8.8）

7. アカデミック会議での，ザッカレー・リシャールによるプレゼンテーション
モンクトン大学，エドマンズトン・キャンパスにて（2014. 8. 14）

8. アカデミック会議でのエルメネジルド・シアッソンによるプレゼンテーション

9. カナダ，N. B. 州とアメリカ合衆国メイン州の国境検問所

10. 国境のセント・ジョン川にかかる橋の前で待つ人々

11. タンタマールの行列に参加する人々　メイン州マダワスカのメイン・ストリート（2014. 8. 15）

12. タンタマールの行列に参加する人々

13. タンタマールの行列に参加する人々

14. タンタマールの行列に参加する人々

15. タンタマールの行列に参加する人々

16. タンタマールの行列に参加する人々

17. ウワレット一族のファミリー・リユニオン（2014. 8. 16〜17）

18. 壁に貼り出されたファミリー・リユニオンのプログラム（英語とフランス語）

19. ファミリー・リユニオンの幹事たち

20. ファミリー・リユニオンでの行事
教会の聖職者を招いてのミサ

21.「女性サミット」の全体会　エドマンズトン，N. B. にて（2014. 8. 17〜19）

22.「女性サミット」後のデモ行進「マイノリティの権利を守れ！」
エドマンズトンにて（2014. 8. 19）

23. 先住民マリシートの居留地（Madawaska Maliseet First Nation）の入り口

24. 先住民マリシートから歓迎の浄めを受ける「女性サミット」参加者たち

25. 先住民マリシート居留地での昼食会

26. アメリカ合衆国メイン州からセント・ジョン川の向こう岸カナダ，
N. B. 州エドマンズトンのカトリック教会をのぞむ

27．アカディアン女性のシンボル，エヴァンジェリン or サグイン?

28．アカディアで最も有名な舞台俳優ヴィオラ・レジェへのラジオ・インタビューのシーン．
モンクトン大学エドマンズトン・キャンパス，マルチメディア・パビリオンでの広報用ブースにて

29. カナダ・ケベック州テミスクワタの湖上で行われた閉会式の模様

30. 閉会式後の大スペクタクル（コンサート）で演奏するミュージシャンたち
ケベック州テミスクワタ=シュル=ル=ラックの公園にて（2014. 8. 24）

31. 代表的なアカディアン・ミュージシャンたち
ロック・ヴワジン，イーディス・バトラー

32. 大スペクタクルのフィナーレ　5年後の再会を願って（2014. 8. 24）

The Changing Acadian Community:
Notes on the *Congrès mondial acadien 2014*

Kazuko Ohta

This paper is a brief report and some thoughts on the 5th *Congrès mondial acadien,* which was held in the summer of 2014, in the so-called Madawaska region, or St. John valley area.

When the idea of the place for the site first came up, some people were seriously concerned about the plausibility of organizing it because of the unique setting. It involved not only two provinces of Canada, but also one state of the U.S.A., which meant that it would be literally an "international" *Congrès*, and that could cause all kinds of troubles and difficulties in the organizing process. Fortunately, those troubles and difficulties were overcome, and it turned out to be a really unique, exciting and successful Congress.

Just like former Congresses, it opened one week before *l'Assomption* day (August 15) and closed one week after. During this two week period, various kinds of events such as ceremonies, concerts, academic conferences, summits, family reunions, outdoor sports, plays, exhibitions etc. took place in Edmundston (NB), Madawaska (ME), Témiscouata (QC) and 50 other small towns, villages, and communities. The official program itself was comprised of over 100 pages, just to list up and introduce those events. On the occasion of *tintammare*, ten thousand people enjoyed walking the street, waving the Acadian flag, making noise, wearing strange costumes, and this time, even crossing the national border!

It is estimated that over 200 thousand people visited this area and attended various programs, and about 28.4 million dollars went to this region during this time. Financially, it was a great success and revitalized this region of 'lands and forests'. Acadians are no longer a small minority group fighting for their survival. They have secured their place in society, living peacefully with neighboring ethnics and first nation peoples, and connecting with the outer world using sophisticated multi-media information services and technology. Acadians seem to be ever more open and inclusive in their attitudes, which seems to be the key to their successful 'survival'.